

幼児の傘の使用に関する保護者の認識

富山大学 西館 有沙

I. はじめに

私たちは降雨時には傘やカッパなどの雨具を使用する。日本は降水量が多く、梅雨などの一定期間は特に雨天の日が続くため、傘などの雨具を使用する頻度は高い。東京都生活文化局消費生活課（2013）は15歳以上の都民を対象に降雨時の危険について調査を行っており、降雨時に傘でヒヤリとした経験や危害を加えた、あるいは受けた経験のある者が半数を超えたこと、カッパ等（レインコートやポンチョ、帽子）でヒヤリとした経験等がある者は7%であったことを明らかにしている。傘で感じた危険については、具体的に「傘で視界が悪くなって、自動車、自転車等の車両にぶつかった・ぶつかりそうになった」、「傘で視界が悪くなって人にぶつかった・ぶつかりそうになった」、「傘が原因で他の人にけがをさせられた・させられそうになった」、「傘が風であおられてけがをした・しそうになった」などが多く挙げられていた。また、同調査では降雨時以外に傘を携行（たたんだ状態）にしていた時にヒヤリとした経験等がある者も4割いることが明らかになっており、その多くは「駅の階段やエスカレーターで前の人を傘を水平に持つ（振る）」ことを、危険を感じた理由に挙げていた。

このように傘やカッパなどの雨具は、時として事故の原因となることがある。国民生活センター（2009）は、2004年度から2008年度の5年間に傘による事故が約60件寄せられたとし、傘でけがをした人は10歳未満の子どもと50代以上の大人に多いとして注意を促している。東京都生活文化局消費生活課（2013）の調査では、

15歳未満の子どものいる回答者のうち、子どもがけがをした、もしくはしそうになった経験がある者が8%いたこと、その半数以上が「傘をぶつけられた・ぶつけた」、「傘で指をけがした」というように、傘に関することであったことが明らかになっている。

傘を原因とする子どもの事故を防ぐには、周囲の大人が子どもに当てることのないように傘を扱う必要があるとともに、子ども自身が傘を安全に正しく使えるように知識と技術を身につけていく必要がある。傘の扱いについて子どもに伝える内容や伝え方を整理するにあたり、子どもが雨具を使い始める年齢やその使用状況、雨具の使用に関する問題点をふまえる必要がある。しかし、これらを明らかにした文献は上述した以外には見あたらない。そこで本研究では、雨具を使い始めると思われる幼児期に焦点をあて、雨天の日に幼児とその保護者はどのように移動しているのか、保護者は幼児の雨具の使用について何を課題であると感じ、家庭内で子どもに何を伝えているのかについて、保護者を対象とした調査を行った。

II. 方法

1. 対象者と手続き

T県内の9か所の保育所や幼稚園、認定こども園に通う2歳クラス～5歳クラスに所属する子ども（2～6歳）の保護者525名を対象に、2019年12月から2020年1月にかけて無記名式・自記式の質問紙調査を行った。質問紙は各クラスの担任から対象者に配布し、430部を回収した（回収率82%）。このうち対象とした年

年齢以外の子どもについて回答したものや無回答が多かったものは無効回答として除いたため、420名分の回答が分析対象となった。回答者の子どもの年齢は、2-3歳が42名、4歳が105名、5歳が145名、6歳が128名であった。

2. 調査項目

回答者とその子どもに関する属性を問う3項目、雨天時の移動手段や歩行方法を問う2項目、子どもの雨具の所有状況や使用状況を問う10項目、傘の扱い方に関する家庭内教育について問う2項目、雨天時の屋外歩行においてヒヤリとした体験を問う2項目の計19項目であった。

3. 倫理的配慮

本研究は、富山大学人間を対象とし医療を目的としない研究倫理審査委員会の承認を得て実施された (J2019015)。

III. 結果と考察

子どもの年齢によって雨天時の外出の仕方や雨具の使い方、雨具の使用に関する課題が異なると推測されたことから、子どもの年齢 (2-3歳、4歳、5歳、6歳) によって結果を分けて示した。

1. 雨天時における子どもとの移動

雨天時の子どもとの移動において用いることの多い移動手段を選択式で尋ねたところ、どの年齢群においても自家用車が最も多く、2-3歳で98% (42名中41名)、4歳が97% (105名中102名)、5歳が99% (145名中144名)、6歳が100% (128名) であった。一方、徒歩は2-3歳が5% (2名)、4歳が5% (5名)、5歳が6% (8名)、6歳が1% (1名) であった。自家用車の所有率が高い地域において調査を実施したため、回答者の大半は、子どもと自家用車で移動することが多かった。

雨の日に子どもと外を歩く場面において、保護者の傘に子どもを入れているのか、各自が雨具を使用しているのかを尋ねた (重複回答可)。「保護者の傘に子どもを入れている」と答えた保護者は、2-3歳で50% (21名)、4歳で36%

(38名)、5歳で48% (70名)、6歳で44% (56名) であり、「各自が雨具を使用している」と答えた保護者は、2-3歳で36% (15名)、4歳で57% (60名)、5歳で66% (95名)、6歳で69% (88名) であった。子どもの年齢による違いがみられるかについて 4×2 の χ^2 検定を行ったところ、「各自が雨具を使っている」 ($\chi^2(3)=16.45$, $p<0.01$) において有意差が認められた。残差分析より、各自が雨具を使っているケースは6歳児において多く、2-3歳児では少なかった。

年齢が上がるにつれて、子どもに自分の雨具を使わせるケースが増える傾向にあることが確認された。一方で、どの年齢においても約4~5割の保護者は、自分の傘に子どもを入れていると回答しており、年齢による違いはみられなかった。雨天時に自家用車で移動した場合、歩く距離が短いために、各自が雨具を使うまでもないことがある。本調査の対象者は自家用車で移動することが多かったため、自分の傘に入れるなどして移動するケースが少なくなかったと推察される。

2. 幼児が使っている雨具

家庭にある子どもの雨具を選択式で尋ねたところ、子ども用の傘は2-3歳児が64% (42名中27名)、4歳児が92% (105名中96名)、5歳児が95% (145名中138名)、6歳児が94% (128名中120名) であった。また、カッパは2-3歳児が48% (20名)、4歳児は83% (87名)、5歳児は63% (91名)、6歳児は60% (77名) であった。年齢による違いはみられるかについて χ^2 検定を行ったところ、傘とカッパのいずれについても有意傾向が認められた (傘: $\chi^2(3)=39.71$, $p<0.1$, カッパ: $\chi^2(3)=22.03$, $p<0.1$)。残差分析より、2-3歳児については傘もカッパも所有率が低く、5歳児では傘の所有率が、4歳児ではカッパの所有率が高かった。

子どもが一人で使うことのある雨具を選択式で尋ねた。家庭に子ども用の傘があると答えた者のうち、実際に子どもが使うことがあると答えた割合は、2-3歳で100% (27名中27名)、

4歳で95% (96名中91名)、5歳で96% (138名中132名)、6歳で100% (120名中120名)であった。家庭に子ども用のカッパがある者のうち、実際に使用していた割合は、2-3歳が85% (20名中17名)、4歳が69% (87名中60名)、5歳が64% (91名中58名)、6歳が75% (77名中58名)であった。傘と比べると、カッパの使用率はどの年齢においても低かった。

子どもに傘を使わせるようになった年齢について選択式で尋ねた(表1)。表1より、2-3歳児の保護者は、2歳からと答えた者が60%と最も多く、4歳以降の子どもの保護者は3歳からと答えた者が最も多かった(4歳は63%、5歳は56%、6歳は43%)。調査への協力は任意であったため、2-3歳児の保護者については実際に雨具を使用している者が回答に応じた可能性が高い。そのため、2-3歳児については傘の開始年齢が2歳からというケースが多くなったと考えられる。また、4歳以降の子どもの保護者はいずれの年齢群においても2割ほどが2歳から使わせていると答えていた。これらのことから、傘を使い始める年齢は3歳が多いが、2歳から使わせているケースもあると言える。

保護者の多くは、子どもには自分専用の傘があり、使うこともあると答えた。また、保護者は早ければ2歳頃から傘を使わせていることが確認された。ただし、2-3歳児で自分専用の傘

があり、その傘を使うことがあるという子どもは約6割であり、他の年齢の子どもと比べると少ない傾向にあった。

3. 子どものカッパの着用に関する課題

子どもにカッパを着せることについて困ることを選択式で尋ねた結果、どの年齢においても「カッパを脱ぎ着させるのが手間である」ことや、「店内等に入った時の脱がせたカッパの扱いに困る」ことが多く、「カッパのフードが子どもの視界を遮ってしまう」が次いだ(表2)。年齢による違いはあるかについて χ^2 検定を行ったところ、「カッパの中が蒸れて汗をかくことを子どもが嫌がる」において有意傾向が認められ、残差分析より4歳児が少なかったものの、それ以外に有意差の認められた項目はなかった。

子どもの年齢に関係なく、カッパの脱着に手間がかかることや脱がせたカッパの扱いに困ると感じている保護者が多い一方で、カッパが視界を遮ったりカッパの裾が物に引っかかったりすることによる安全上の問題を感じている保護者はそれほど多くはなかった。また、カッパの着用を子どもが嫌がると答えた保護者は少なかった。カッパのフードで視界が遮られる問題を挙げた者が約2、3割であった背景には、フードの前方が透明になっているなど、フードをかぶっても視界を確保できるカッパが市販されていることがあると推察される。

表1. 子どもに何歳から傘を使わせているか(選択式・単数回答)

	2-3歳(n=27)	4歳(n=91)	5歳(n=132)	6歳(n=120)
1歳から	7% (2名)	1% (1名)	2% (2名)	0
2歳から	67% (18名)	23% (21名)	20% (26名)	21% (25名)
3歳から	26% (7名)	63% (57名)	56% (74名)	43% (52名)
4歳から	—	11% (10名)	20% (26名)	21% (25名)
5歳から	—	—	2% (2名)	9% (11名)
6歳から	—	—	—	3% (3名)
その他	0	1% (1名)	1% (1名)	3% (4名)
無回答	0	1% (1名)	1% (1名)	0

※%の母数は、子どもに傘を使わせることのある保護者

表 2. カップの使用において困ること（選択式・重複回答）

	2-3 歳(n=17)	4 歳(n=60)	5 歳(n=58)	6 歳(n=58)	χ^2 値
カップの脱着が手間である	71% (12 名)	65% (39 名)	55% (32 名)	62% (36 名)	1.89
店内等に入った時の脱がせた カップの扱いに困る	59% (10 名)	67% (40 名)	79% (46 名)	60% (35 名)	5.67
カップのフードが子どもの 視界を遮ってしまう	18% (3 名)	22% (13 名)	28% (16 名)	17% (10 名)	2.02
カップの肌触り（着用感）を 子どもが嫌がる	12% (2 名)	3% (2 名)	10% (6 名)	3% (2 名)	4.21
カップの中が蒸れて汗をかく ことを子どもが嫌がる	6% (1 名)	2% (1 名)	16% (9 名)	12% (7 名)	7.55 [†]
カップの裾が物に引っかかる	6% (1 名)	2% (1 名)	5% (3 名)	5% (3 名)	1.37
その他	6% (2 名)	3% (2 名)	10% (8 名)	10% (6 名)	—

※%の母数は、子どもにカップを使わせることのある保護者

[†]: $p<0.1$

4. 子どもに傘を使わせることに関する課題

家庭にある子どもの傘のタイプについて選択式で尋ねたところ、手開き式の長傘が 2-3 歳児の 81% (27 名中 22 名)、4 歳児の 71% (96 名中 68 名)、5 歳児の 63% (138 名中 87 名)、6 歳児の 53% (120 名中 63 名) であり、ワンタッチ式の長傘が 2-3 歳児の 26% (7 名)、4 歳児の 27% (26 名)、5 歳児の 36% (49 名)、6 歳児の 52% (62 名) であった。 χ^2 検定の結果、いずれにおいても有意差が認められた（手開き式： $\chi^2(3)=12.16$, $p<0.01$, ワンタッチ式： $\chi^2(3)=16.43$, $p<0.01$ ）。残差分析より、傘が手開き式であるケースは 4 歳児において多く、6 歳児では少なかった。一方のワンタッチ式は 6 歳児において多く、4 歳児では少なかった。

6 歳児については、その 94% に自分専用の傘があり、専用の傘がある子ども全員が傘を使うことがあった。このことから、6 歳児の約半数はワンタッチ式の傘を使っていることになる。ワンタッチ式の傘には子どもが一人でも容易に開くことができるという利点がある。一方で、ボタンを誤って押したことで開くつもりのない傘が開いてしまったり、周りの安全確認が不十分なままにボタンを押したことで人や物に傘が当たったりしやすいことが問題点として挙げら

れる。

図 1 の①から③のイラストを示し、子どもにどのように傘をさしてほしいかを選択式で尋ねた（表 3）。①は「柄を肩に置く」であり、②は「柄をまっすぐ立てる」であり、③は「柄を前方に傾ける」である。道路交通法に基づいて作成された交通安全教育指針（1998 年、国家公安委員会告示第 15 号）には、幼児や小学生に対する交通安全教育の内容として、「雨天時には、前が見えにくくなるような傘の差し方をしないようにすること」を扱うようにと記されている。このことに照らすと、③の「柄を前方に傾ける」傘のさし方は、傘によって前方の視界が遮られてしまうので不適切である。①と②については、それぞれに利点と欠点が挙げられる。①のように傘の柄を肩に置くと、前方の視界を確保しつつ、傘を持つ手にかかる負荷を軽減できるが、前方からの風の影響を受けやすくなることや、斜め後方が傘に遮られて見えなくなることが問題点として挙げられる。一方、②のように傘の柄をまっすぐに立てると、前後左右からの風の影響を受けにくく、かつ前方から斜め後方までの広い視界を確保できる。ただし、腕の力が弱い子どもの場合、傘を持つ腕が疲れて下がってくることで、前方の視界が傘で遮られるという

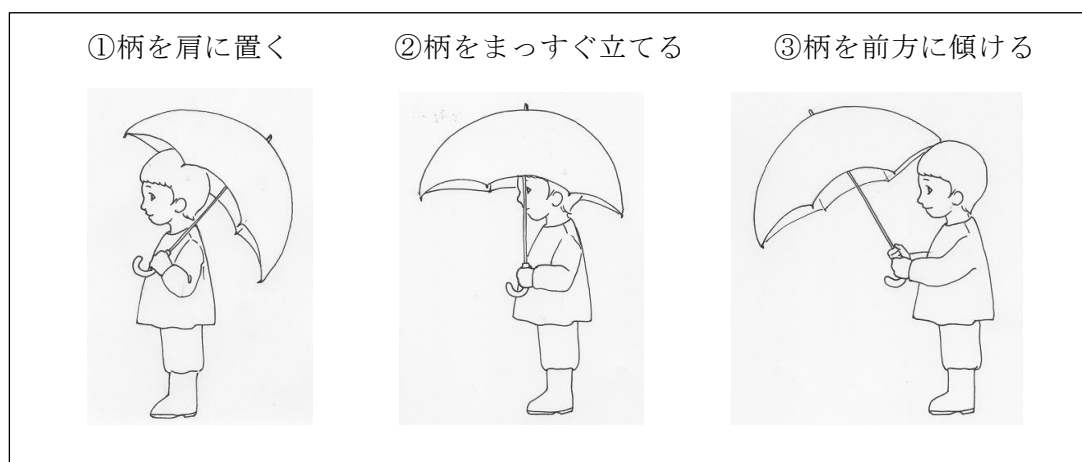


図 1. 傘のさし方の種類

表 3. 子どもにどのように傘をさしてほしいか (選択式・重複回答)

	2-3 歳(n=27)	4 歳(n=91)	5 歳(n=132)	6 歳(n=120)	χ^2 値
①柄を肩に置く	59% (16 名)	58% (53 名)	50% (66 名)	38% (45 名)	10.64*
②柄をまっすぐ立てる	44% (12 名)	51% (46 名)	55% (73 名)	68% (81 名)	8.84*
③柄を前方に傾ける	11% (3 名)	3% (3 名)	4% (5 名)	3% (3 名)	4.58

※%の母数は、子どもに傘を使わせることのある保護者

*: $p < 0.05$

ことが起こりうる。正しい傘のさし方を示している文献は見あたらないが、これらのことをふまえると、子どもには②のさし方を基本として伝え、腕が疲れた時には傘が前方に傾かないための対処策として、一時的に①のさし方をしてよいことを伝えていくことが望ましいと考えられる。

表 3 より、2 歳から 5 歳までの子どもの保護者は①を選択した者が最も多く、6 歳児の保護者は②を選択した者が最も多かった。また、少数ではあるが③を選択した者がいたことから、保護者には③のさし方が不適切であることやその理由について情報を提供していく必要がある。

表 3 の結果について子どもの年齢による違いはあるかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、①と②に有意差が認められ (①: $\chi^2(3)=10.64, p < 0.05$, ②: $\chi^2(3)=8.84, p < 0.05$)、残差分析より、①を選ぶケースは 4 歳児の保護者に多く、6 歳児の保護者では少なかった。また、②を選ぶケースは 6 歳児の保護者に多かつ

た。年齢の低い子どもの場合、傘を肩で支えなければ傘を安定させることができないと考えられる。そのため、年齢の低い子どもの保護者は肩に傘を置くことが望ましいと考える傾向にあったと推察される。年齢が上がるにつれて傘を安定して持つことができるようになることから、6 歳児では柄をまっすぐに立て、視界を確保しつつどの方向からの雨も防ぐことのできる①の持ち方が望ましいと保護者が考えていることがうかがえる。

子どもが図 1 の③のように、柄を前方に傾ける傘のさし方をすることがあるかを選択式で尋ねたところ、頻繁にあるという回答は少なかったものの、時々あるという回答は 2-3 歳児で 47%、4 歳児は 33%、5 歳児は 40%、6 歳児は 30%であった (表 4)。年齢による違いを明らかにするために 4×3 の χ^2 検定を行ったところ、有意傾向が認められ ($\chi^2(6)=11.10, p < 0.1$)、残差分析より、6 歳児においてほとんどないと答えた保護者が多かった。

表 4. 子どもは図 1 の③のようなさし方をすることがあるか (選択式・単数回答)

	2-3 歳(n=27)	4 歳(n=91)	5 歳(n=132)	6 歳(n=120)	χ^2 値
頻繁にある	11% (3名)	8% (7名)	9% (12名)	3% (4名)	11.10 [†]
時々ある	52% (14名)	34% (31名)	40% (53名)	30% (36名)	
ほとんどない	44% (12名)	58% (53名)	49% (65名)	66% (79名)	
無回答	4% (1名)	3% (3名)	2% (3名)	1% (1名)	

※%の母数は、子どもに傘を使わせることのある保護者

[†]: $p<0.1$

表 5. 子どもが③のようなさし方をする理由 (選択式・重複回答)

	2-3 歳(n=17)	4 歳(n=38)	5 歳(n=65)	6 歳(n=40)	χ^2 値
傘をうまく支えられない	71% (12名)	63% (24名)	49% (32名)	50% (20名)	3.97
傘を両手で持とうとする	41% (7名)	26% (10名)	17% (11名)	20% (8名)	5.02
傘を振って遊ぶ	12% (2名)	5% (2名)	23% (15名)	10% (4名)	7.28 [†]
その他	6% (1名)	26% (10名)	22% (14名)	43% (17名)	—

※%の母数は、子どもが③のさし方をすることが「頻繁にある」「時々ある」と答えた保護者

[†]: $p<0.1$

子どもが図 1 の③のように柄を前方に傾ける傘のさし方をする理由を選択式で尋ねたところ、どの年齢群においても「傘をうまく支えられない」が最も多く、「傘を両手で持とうとする」が次いだ (表 5)。年齢による違いを明らかにするために χ^2 検定を行ったところ、「傘を振って遊ぶ」において有意傾向が認められ ($\chi^2(3)=7.28$, $p<0.1$)、残差分析より 5 歳児に多かった。

このように、幼児期の子どもでは傘を支える腕の力が弱いことによって傘を持つ手が下がり、柄が前方に傾いてしまうケースがある。これを防ぐために傘を両手で持つ場合においても、傘を両手で持つと前方の視界を確保するために両手を高く保たなくてはならない。そのため、子どもの意識が傘を持つ手から離れたり、手が疲れたりすることで、結果的には両手が下がり、柄が前方に傾いてしまうことになると考えられる。なお、5 歳児では傘を振って遊ぶことを理由とするケースが多い傾向にあった。これは、5 歳頃から徐々に親の傘に入るのではなく、自分の傘を使うようになるためであると推察される。

子どもが自分で傘を使用することについて困

ることを尋ねた (表 6)。表 6 より、2-3 歳児の保護者は「子どもと手をつなげない」と答えた者が 59% と最も多く、「傘が子どもの視界を遮ってしまう」が次いだ (48%)。また、4 歳児や 5 歳児の保護者は「子どもと手をつなげない」、「傘が子どもの視界を遮ってしまう」と答えた者がそれぞれに半数程度であった。6 歳児の保護者は「子どものさす傘がすれ違う人にぶつかる」と答えた者が 52% と最も多く、「傘が子どもの視界を遮ってしまう」が次いだ (46%)。また、どの年齢の子どもについても、「子どものさす傘がすれ違う人にぶつかる」、「子どもが周りを確認せずに傘を開く」と答えた保護者が 3 割を超えた。年齢による違いが見られた項目は「子どもが開いた傘を振り回して遊ぶ」であり ($\chi^2(3)=12.34$, $p<0.01$)、5 歳児において多かった。これは先述のように、5 歳頃から自分の傘を使うことが増えることによると考えられる。

子どもと手をつなげない、傘によって視界が遮られるなど、子どもの安全を損なう可能性があることを問題として挙げた保護者がどの年齢群においても半数程度いた。また、子どもの傘が周りの人にぶつかることを心配する保護者も

表 6. 子どもが自分で傘を使用することについて困ること (選択式・重複回答)

	2-3 歳(n=27)	4 歳(n=91)	5 歳(n=132)	6 歳(n=120)	χ^2 値
子どもと手をつなげない	59% (16 名)	52% (47 名)	50% (66 名)	41% (49 名)	4.54
傘が子どもの視界を遮って しまう	48% (13 名)	53% (48 名)	52% (68 名)	46% (55 名)	1.26
子どものさす傘がすれ違う 人にぶつかる	41% (11 名)	46% (42 名)	44% (58 名)	52% (62 名)	1.99
子どもが周りを確認せずに 傘を開く	41% (11 名)	45% (41 名)	45% (59 名)	43% (52 名)	0.21
子どもがたたんだ傘を無意識 に周りの物や人にぶつける	22% (6 名)	23% (21 名)	27% (36 名)	25% (30 名)	0.65
子どもと並んで歩けない	15% (4 名)	25% (23 名)	23% (31 名)	18% (22 名)	2.49
子どもが開いた傘を振り回し て遊ぶ	11% (3 名)	7% (6 名)	20% (26 名)	8% (9 名)	12.34**
子どもがたたんだ傘を振り回 して遊ぶ	7% (2 名)	12% (11 名)	11% (15 名)	10% (12 名)	0.60
その他	7% (2 名)	8% (7 名)	11% (15 名)	% (7 名)	—

※%の母数は、子どもに傘を使わせることのある保護者

** : $p < 0.01$

少なくなかった。

5. 傘の扱い方に関する家庭内での教育

傘の扱い方について家庭で子どもに教えたことはあるかどうかを選択式で尋ねた結果、教えたことがあると答えた者は 2-3 歳で 45% (42 名中 19 名)、4 歳で 71% (105 名中 75 名)、5 歳で 63% (145 名中 92 名)、6 歳で 67% (128 名中 86 名) であった。一方、教えたことはないと答えた者は、2-3 歳で 31% (13 名)、4 歳で 22% (23 名)、5 歳で 33% (48 名)、6 歳で 32% (41 名) であった。年齢による違いは認められなかった ($\chi^2(3)=4.71, n.s.$)。

傘の扱い方を教えたことがあると答えた保護者に、家庭で子どもに教えている内容を選択式で尋ねた (表 7)。表 7 より、2-3 歳児の保護者は「物や人にぶつからない場所で傘を開く」、「傘を振り回さない」、「傘の柄を両手でしっかり持つ」ことを教えたと答えた者が多かった。4 歳児、5 歳児、6 歳児の保護者は「物や人にぶつからない場所で傘を開く」、「傘を振り回さない」、「傘を前方に傾けて視界を塞がない」ことを教

えたと答えた者が多かった。年齢による違いが見られた項目は「物や人にぶつからない場所で傘を開く」($\chi^2(3)=8.03, p < 0.05$)、「傘の柄を両手でしっかり持つ」($\chi^2(3)=10.06, p < 0.05$) であった。残差分析より、2-3 歳児の保護者で「物や人にぶつからない場所で傘を開く」ことを教えた者は少なかった一方、「傘の柄を両手でしっかり持つ」ことを教えた者は多かった。

周囲の迷惑とならないように、周囲の人にけがをさせないように、ぶつからない場所で傘を開くことや傘を振り回さないことを伝えている保護者が多かった。特に自分で傘を使うようになる 5 歳以降の子どもにこれらの内容を伝えた保護者は 7 割を超えた。また、「傘を前方に傾けて視界を塞がない」ことを伝えた保護者は、どの年齢群においても約 4 割であったが、代わりに傘の持ち方 (柄を両手でしっかり持つ、柄を片手でしっかり持つ、柄の部分に肩に置く、柄の部分は肩に置かずまっすぐさす) について伝えている保護者は多かった。傘の持ち方については、子どもが低年齢のうちには「両手でし

っかり持つ」ように伝えている保護者が多かった。保護者は子どもの体力に合わせて傘の持ち方を伝えることに重きをおいており、子どもや周囲の安全については自らが目を配るようにしているものと推察される。

傘のさし方を教えたことがあると答えた保護者に、どのような方法で子どもに教えたかを選択式で尋ねた(表8)。2-3歳児の保護者は、「傘を使う機会に、不適切な使い方をその都度注意する」ことが最も多かったが、「傘を使う機会に、

子どもが慣れるまで傘の上部を持ち、正しい持ち方を体で覚えさせる」、「家にいる時に、実際の傘を使って練習する」と答えた保護者も3割を超えた。4歳児や5歳児の保護者は「傘を使う機会に、不適切な使い方をその都度注意する」ケースが8割を超え、また「傘を使う機会に、子どもが慣れるまで傘の上部を持ち、正しい持ち方を体で覚えさせる」ケースも約3割であった。6歳児の保護者は「傘を使う機会に、不適切な使い方をその都度注意する」ケースが9割

表7. 傘の扱い方について子どもに伝えた内容(選択式・重複回答)

	2-3歳(n=19)	4歳(n=75)	5歳(n=92)	6歳(n=86)	χ^2 値
物や人にぶつからない場所で傘を開く	58% (11名)	81% (61名)	86% (79名)	81% (68名)	8.03*
傘を振り回さない	58% (11名)	64% (48名)	71% (65名)	73% (61名)	2.08
傘の柄を両手でしっかり持つ	47% (9名)	16% (12名)	20% (18名)	18% (15名)	10.06*
傘を前方に傾けて視界を塞がない	37% (7名)	40% (30名)	43% (40名)	38% (32名)	0.82
傘の柄を片手でしっかり持つ	21% (4名)	13% (10名)	15% (14名)	6% (5名)	5.56
傘を下に向けた状態で開く	16% (3名)	16% (12名)	12% (11名)	11% (9名)	1.31
傘の柄の部分を肩に置く	11% (2名)	21% (16名)	15% (14名)	8% (7名)	5.96
傘の柄の部分は肩に置かずにまっすぐさす	11% (2名)	7% (5名)	5% (5名)	10% (8名)	1.31
その他	11% (2名)	5% (4名)	5% (5名)	2% (2名)	—

※%の母数は、この設問に回答した保護者

* : $p < 0.05$

表8. 傘の扱い方について子どもに教えた方法(選択式・重複回答)

	2-3歳(n=19)	4歳(n=75)	5歳(n=92)	6歳(n=86)	χ^2 値
傘を使う機会に、不適切な使い方をその都度注意する	63% (12名)	84% (63名)	87% (80名)	93% (78名)	9.90*
傘を使う機会に、子どもが慣れるまで傘の上部を持ち、正しい持ち方を体で覚えさせる	37% (7名)	31% (23名)	26% (24名)	13% (11名)	9.72*
家にいる時に、傘を使って練習する	32% (6名)	3% (2名)	8% (7名)	7% (6名)	17.94**
その他	5% (1名)	3% (2名)	1% (1名)	1% (1名)	—

※%の母数は、この設問に回答した保護者

** : $p < 0.01$, * : $p < 0.05$

を超え、「傘を使う機会に、子どもが慣れるまで傘の上部を持ち、正しい持ち方を体で覚えさせる」ケースは1割程度であった。年齢による違いが見られた項目は「傘を使う機会に、不適切な使い方をその都度注意する」($\chi^2(3)=9.90, p<0.05$)、「傘を使う機会に、子どもが慣れるまで傘の上部をもち、正しい持ち方を体で覚えさせる」($\chi^2(3)=9.72, p<0.05$)、「家にいる時に、実際の傘を使って練習する」($\chi^2(3)=17.94, p<0.01$)であった。残差分析より、2-3歳児の保護者はその都度注意する者が少なく、家にいる時に傘を使って練習する者が多かった。また、6歳児の保護者においては、傘の上部を持って正しい持ち方を体で覚えさせる者が少なかった。

6. 雨天時の子どもの歩行に関するヒヤリ体験

子どもの雨具が周囲の人や物にぶつかったなどによりヒヤリとした体験があるかどうかについて自由記述式で尋ねたところ、2-3歳児の保護者9名、4歳児の保護者38名、5歳児の保護者42名、6歳児の保護者40名より回答を得た。得られた回答についてカテゴリー分類を行った結果を表9に示した。表9より、どの年齢の子どもも、「傘が他者に当たった・当たりそうになった」体験や「傘が駐車中の車に当たった・当たりそうになった」体験が多く挙げられた。年齢による違いが認められた項目はなかった。

「傘が他者に当たった・当たりそうになった」事例は、子どもが周囲を確認せずに傘を開いたことや、傘の幅や奥行きを考えずに人に近づいたりすれ違ったりすることなどが原因となっていた。当たった、もしくは当たりそうになった相手が子どもであるケースでは、登園や降園の際に「傘を開いた際に、そばにいた友達に当たりそうになった」、「傘をさしたまま友達に近づいていき、傘の先が友達の顔に当たりそうになった」、「通園路で子どもの傘がフェンスに引っかかり、急に立ち止ることになったことによって、後ろを歩いていた子どもに傘が当たりそうになった」といった事例が挙げられた。

周囲の人の雨具が子どもにぶつかったなどによりヒヤリとした体験について自由記述式で尋ね、2-3歳児の保護者2名、4歳児の保護者10名、5歳児の保護者15名、6歳児の保護者12名より回答を得た。得られた回答をカテゴリー分類した結果、2-3歳児や4歳児の保護者は「他児の傘が当たりそうになった」、「大人の持つ傘が子どもに当たりそうになった」がいずれも50%であった。5歳児では「他児の傘が当たりそうになった」が47% (7名)、「大人の持つ傘が子どもに当たりそうになった」が40% (6名)であった。6歳児では「大人の持つ傘が子どもに当たりそうになった」が58% (7名)と多く、

表9. 子どもの雨具が周囲の人や物にぶつかったなどのヒヤリ体験 (自由記述式)

	2-3歳(n=9)	4歳(n=38)	5歳(n=42)	6歳(n=40)	χ^2 値
傘が他者に当たった・当たりそうになった	33% (3名)	45% (17名)	40% (17名)	45% (18名)	0.56
傘が駐車中の車に当たった・当たりそうになった	33% (3名)	34% (13名)	31% (13名)	50% (20名)	3.65
傘で走行車に気づかずに近づいた・横断した	11% (1名)	13% (5名)	10% (4名)	5% (2名)	1.58
傘が柵や溝に引っかかった	11% (1名)	5% (2名)	7% (3名)	3% (1名)	1.48
傘が物に当たった	0	5% (2名)	7% (3名)	8% (3名)	0.83
傘に関するその他	22% (2名)	11% (4名)	17% (7名)	10% (4名)	—
カッパでのヒヤリ体験	0	0	2% (1名)	3% (1名)	1.17

「他児の傘が当たりそうになった」が 25% (3名) と次いだ。いずれの内容についても年齢による違いは見られなかった。

IV. まとめ

傘を使い始める年齢は早ければ 2 歳頃からであり、3 歳からが最も多かった。ただし、2-3 歳児で自分専用の傘がある子どもは約 6 割であり、自分専用の傘がある子どもが 9 割を超えたのは 4 歳以降であった。特に年齢の低い子どもが傘を使う場合、傘を支え続ける力がないことにより、傘が前方に傾きやすく、子どもの視界が傘で遮られてしまうことが起こりうる。年齢が上がるにつれて、傘が前方に傾くことは減る傾向にあるものの、傘を一人で安全に使うことにはむずかしさがあり、近くに人がいるところで傘を開いたり、持っている傘を周りの人にぶつけてしまったりすることが起こりうる。そのため、幼児が片手で傘を支えることがむずかしい場合は、雨天時に一人での傘の使用は控えるべきである。また、幼児が傘を使う際には大人がそばについて、子どもと周りの人の安全に気を配る必要がある。

子どもが傘を使うことで、手をつなげなくなることの問題と感じている保護者は、2-4 歳児は 5 割を超え、5 歳児では 5 割であり、6 歳児でも 4 割を超えた。交通事故総合分析センター (2019) によれば、2018 年度において歩行中に事故にあった幼児の法令違反行為として多かったのは飛び出し (55%) であり、幼児の一人歩き (12%) や信号無視 (11%)、走行車両の直前直後の横断 (7%) が続いていた。消費者庁 (2019) は幼児の交通事故を防ぐために、保護者に向けて子どもと手をつなぐこと、子どもに交通ルールを伝えること、道路越しに子どもに声をかけないこと、道路上や道路の近くで子どもを遊ばせないことを提唱している。これらのことをふまえると、車両の交通量の多い場所を歩く際や駐車場内を移動する場合は、子どもと手をつなげる状態にしておくために、大人の

傘に入れたり、カップを使用したりするなどの対応が必要であると言える。

一方で、小学生になれば一人で傘等を使って移動するようになるため、幼児期から傘の扱い方を伝えていくことは大切である。保護者は、言葉で伝えるだけでなく、家で練習をしたり、子どもの傘の上部を持ち、正しい持ち方を子どもが体で覚えられるようにしたりしていた。傘を開いたときに、傘の骨組みの先端が同じくらいの年齢の子どもの顔や、保護者が抱いている弟や妹の顔に当たる位置にあるということは、屋外で傘を使っている最中よりも、練習の時に試してみる方が、子どもに伝わりやすいと推察される。したがって、傘を使っている時に言葉で繰り返し伝えるだけでなく、練習の時間をもつことは有効であると考えられる。

幼児に伝えるべき内容は、保護者が課題と感じていることや保護者がヒヤリとした事例から、安全な傘の開き方、開いている傘の持ち方、閉じている傘の持ち方に整理できる。具体的には、自分の前後に人がいないかどうかを確認してから、身体の前で傘を開くこと、傘は開いている時にも閉じている時にも振り回してはいけないことを伝える。また、雨天時には急な風に傘があおられたり、傘が物に引っかかったり、濡れた路面で足が滑ったりすることによって、転倒する可能性が高まる。そのため、傘は片手で持つように伝えるべきであろう。傘のさし方については、柄をまっすぐに立てて持つように伝えるとともに、腕が疲れたからといって柄が前方に傾かないように気をつけ、腕が疲れてしまったら少しの間、柄を肩に置いてもよいと伝えることが望ましいと考えられる。加えて、柄をまっすぐに立てた時と肩に置いた時、前方に傾けた時では、周りの見え方が違うということを子どもと実際に確認してみることが望ましい。さらに、閉じた傘については、側溝にはまったり地面の凹凸や周りの物に引っかかったりすることを防ぐために、地面から浮かせて体と水平にして持つように伝える必要がある。

文献

北川啓介・長坂真理子・呉明宣・井上暁代(2008) 妊婦と乳幼児帯同者の行動制限とその要因, 日本建築学会計画系論文集, 73(628), 1243-1250.

国民生活センター(2009) 傘の事故, 暮らしの危険, 290, 1-4.

交通事故総合分析センター(2019) 交通統計

平成30年版, 交通事故総合分析センター.
消費者庁(2019) 子どもを事故から守る 事故防止ハンドブック, 消費者庁消費者安全課.
東京都生活文化局消費生活課(2013) ヒヤリハット調査「降雨時の身の回りの危険」, 東京都ホームページ, < www.shouhiseikatu.metro.tokyo.jp/.../report_rainy.pdf>, (最終閲覧日: 2020年8月27日).

Parents' perceptions about the use of umbrellas by young children

The purpose of this study was to examine the content and methods of teaching children about the handling of umbrellas, to determine the use of umbrellas by young children aged 2 to 6 years old, what parents perceive as challenges, and what parents teach their children. A questionnaire survey of 525 parents of young children was conducted. A total of 430 copies of the answered questionnaire were collected. Of these, 420 were included in the analysis.

The age at which children started using umbrellas was most often from the age of three. However, children aged 2-4 years old were more likely to hold hands with their parents or guardians in rainy weather or to be carried by their parents or guardians under their umbrellas, and they tended to gradually use their own personal rain gear from around age 5. Regarding children's use of their own umbrellas, parents perceived problems with their children not being able to hold hands with them, the umbrellas blocking their children's view, the umbrellas that their children were pointing at bumping into people passing by, and their children opening the umbrellas without checking their surroundings. For this reason, they told the children about how to open and hold the umbrella.

Children of a younger age find it difficult to support an umbrella well, and their vision is easily obstructed by the umbrella tilting forward. Also, during infancy, children may open their umbrellas in the vicinity of people and happen to hit people around them with their umbrellas. It is important to teach children how to open and hold an umbrella from an early age, as elementary school students will be able to get around on their own, even in rainy weather. However, when moving with young children in heavy vehicle traffic or in a parking lot in rainy weather, children should be placed under an adult umbrella or the child should be dressed in rainwear, so that they can hold hands with their parents or guardians.